

文芸

俳句

蓮折れてうすき日光載せてをり

池田 逸子

ふろふきの透きとほりたる熱さかな

伊藤 敬子

母強し負んぶに抱つこの暮帰省

今関満喜子

日向ぼこ猫の欠伸に誘われる

魚地 照子

立冬の雨しみじみと地に人に

江森 悦子

鉦を手に冬至南瓜に挑む妻

川島 通則

小春日や老人ホームのウォーキング

向後 寛

初穫りの大根もちひし佳き日かな

越川せつ子

新酒とて今宵はコップ二杯とす

越川 義則

散歩道木の実踏みしめ暮れにけり

小松 藤男

行く秋の見なれし坂田池巡る

佐瀬 輝夫

頬かむりすれば鼻から笑い出す

椎名万里子

晩年を助け合いつつ師走かな

鈴木とし子

ポインセチア柄のネクタイクリスマス

鈴木 利子

餅つきの始まりそろふ家族かな

玉虫 栗扇

初霜を窓越しに見る薄明り

土屋美枝子

障害を語る女生徒冬の花

土屋 義昭

頬染めて杵振り揚げて餅をつく

戸村 静華

老猫の目に力なし冬隣

早川 勇

山茶花の白の目覚めでありにけり

藤田 雅夫

短歌

気にかかる文書き終へてひとときの

朝を歩けば百舌鳥なきわたる

当り年台風竜巻干砂崩れ

自然災害幾たび怯ゆ

紅葉し枯木に昇る鳶のあり

美しい色初冬を告げし

滝の名にロマンを感じ探し行く

月待の滝は何処なるらむ

現世を離りし吾娘の十三年

夜半の目覚めに思ひてあたり

.....

.....

.....

.....

.....

.....

幼きが笑みつつ帰り手に持つは

研修生の作る人形

駐車場の広きに散りて模様なす

公孫樹黄葉は舞ひ立ちながら

運動会の行進の中その母を

見つけ泣き出す園児もいたり

さはりつつ寝入りし母の襟ぼくろ

感触今も指に残れり

もらいたる紅色甘藷を焼きあげて

口に入れるとほつこり甘い

夕暮の海の写真に写る夫

共に釣りせし彼の日をも思ふ

親指のリハビリならむと皮を剥く

落花生の実ややに小粒を

太巻のすしを教える人の手の

巧みな動きに目を見張りたり

天心にゆく程碧深き冬の空

心吸はれて仰ぎぬにけり

野山にて遊びて来しか小雀は

吾庭にしばし止まりをりぬ

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

こうほう 博物館 70

穴の開いた酒杯

今から二十年ほど前に発掘調査が行われた篠本城跡からは、多くの様々なものが出土した。
最も多かったものは、室町時代に日常使われた焼き物類で、高級なもの輸入物類があり、最も安いものは土製の小皿である。その土製小皿の中に、底に穴を開けたとても使えそうにない器が二点あった。当時土製の小皿を使うことは一回限りの酒杯で、「かわらけ」とも言われ、一夜の酒宴で使ったあと、捨てられたものである。

日本ではこうやってお酒を飲むにしても、遊び心を發揮して、楽しんだのである。正月の一杯も、このように楽しんでみてはいかがでしょうか。
(社会文化課 道澤明)



篠本城跡出土の穴の開いた土製小皿